
春の嵐

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の嵐

【コード】

N9086K

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

生理が来ない。もしかして。

あれほど言っていたのに、どうしていつもこんなに部屋がっぱいな。

私は貴方の家政婦ではないって言ってるでしょ。共稼ぎって男にとってあまり変わらないのに、女にとってはどうしてこんなに忙しいの。週末は掃除、洗濯に追われ、普段は夕食の準備と洗濯物をたたんだり、風呂の用意、夕食の準備はいつの間にか私の仕事になった。

これで、子供が生まれたらどうなるんだろう。先輩が言ってたなあ、女は千手観音のように働き続けるって。

本当は生理が来ないのよ。でも、私も今仕事が忙しいし、遣り甲斐もある。うちの会社は結構優遇してくれるんだけど、休んだ間は完全無給となる。産休明けに保育園も入れるとは限らない。今から8ヶ月後というと、1月出産。ということとはボーナスはでる。欲しいわよ。お金はこれから掛かることが目に見えてるんだから。でも、保育園、どうかなあ。

いつそ、田舎の母を呼んで手伝ってもらうことにしようか。でも、母はどこに住むの？ここは2Kだから、無理よね。もう嫌になるなあ。豪ちゃんと真剣に将来のことを話さないか。今日は病院に行かないか。昼休みに行ってみよう。

Y産婦人科。ここは女医さんと聞いたけど、ドキドキするなあ。

「小柳さん、小柳なつみさん」

「はい」

女医さんは眼鏡を掛けた50代くらいの綺麗な先生だった。

「そうねえ、11月頃ね。今2カ月。おめでとうございます」

「はあ、どうも」

「あら、嬉しくないの？」

「いえ、嬉しいけど、生まれてからの生活が少し厳しくなるなって」

「そうね、女性は大変よ。旦那さんに手伝ってもらわないと」

「はい」

「でも、無理しないで。安定期に入るまでは」

「分かりました」

病院を出ると、桜の花弁が散っている。なつみの掌にも。ふと、女の子が生まれるような予感がした。豪の会社の車が止まっている。豪が乗っていたりしてと、あるはずもないことを思いながら、道沿いの喫茶店を外から見ると、豪の姿が見えた。

「あら、偶然だわ。中に入ろう」

すると、彼の前に一人の女性が座った。自分と同じくらいかもつと若い。私は26歳、彼女は22、3に見える。ふと、胸騒ぎがした。嫌だと思つと、尚更視線がそっちへ向いてしまう。すると、彼女は泣いてるように見える。

「えっ？」

これは完全に裏切り？

心臓が早鐘のように打ち、とにかくその場をあわてて走り去るしかなかった。

妊娠とはそういう時に分かるもの。ひよつとして彼女もそうだったらどうしよう。保育園を探すどころの話ではない。

会社に戻つても胸が締め付けられるようで、仕事に身が入らない。やっと、5時半になった。足取り重く家に帰ると、ケータイに電話。

「はい」

「今日は、部長に誘われて飲み会になった。ごめん」

「そう」

そんなことはきつと嘘。でも、あくまでも推測だから。買ってきた大根が重い。鏡を見ると、疲れ切った主婦の顔。今日の彼女は若くて綺麗だった。髪もロングで一つにまとめていたバレッタも素敵なものだった。私の髪？この前カットしたけど安いキャンペーンをしている店で2500円だった。このブラウスはカタログで買った

3800円。コートはバーゲンで半額の1万円。安い女ね。いつから？

私はこれからさらにお腹がつきでて、外股で歩くのよ、足元も安い運動靴になるんだわ。何だか泣けてきた。小柳なつみってこんなにごうでもいい女だったっけ。確か豪と安田君が私をとりあつた時期もあつたのは、大昔なの？

「やめた。今日は金曜日。私も飲みに行く」

ケータイのチャットには、もう誰も囁いてくれなくなってる。着信履歴も豪ばかり。後は母。飲みに行く友達もない。仲のよかつた幸も妻となつて、母となつた。私は外で会う友達ももういないんだ。仕方なしに母に電話する。

「もしもし、母さん？」

「あら、なつみ。久しぶりじゃないの。ちょっと油もの揚げてるから後にして」

そう言つて切れた。途端に涙があふれてきた。しゃくりあげて泣きだした。何が哀しいかよく分からないけど、これ以上不幸な女はいないと思えた。泣いて泣いて声をあげて泣いた。30分もすると母から電話がかかつて来た。

「もしもし、なつみ？ 何の用だったの？」

「もういいの」

「何よ、今日はいとこの辰夫君も来てるから海老フライ作つてたのよ」

「辰夫君？」

「そうよ、代ろうか、辰夫君、なつみよ」

彼は私より2歳上で、私は憧れていた。確か県外で公務員をしていた。

「もしもし、なつちゃん？」

「うん、元気？」

「ああ、今日は海老をもらったからここで料理してもらってるんだ」
「おばさんは元気？」

「ああ、俺の見合い写真を配り歩いてるさ」

「まだ、結婚しないの？」

「まだで悪かったな。いろいろ見極めてるの」

「そう」

「元気ないじゃないか。どうした、何かあったか？」

「ううん。ちよつと疲れてて」

「あのね、たまには顔見せに帰ってこいよ。豪君も一緒に」

「うん、そうする」

話すこともなくて電話は切ったけど、久しぶりに聞いた母といとこの声は懐かしく、心がほつとするようだった。別に秘密や大事な話をしたわけでもないのに。

気持ちを切り替えたい、そう思って大根をサラダにし、アボガドを添えた。ミヨウガも散らした。冷凍のマグロも解凍してのせた。美味しそうなカルパッチョの出来上がり。麵つゆとすし酢を同量でドレッシングにした。食欲もわいてきた。

ガチャツ。

「ただいま」

「あら、遅いんじゃないの？」

「ああ、今日は気分が乗らないから一杯だけで」

「そう」

(やっぱり憂鬱なんだ、豪ちゃん)

「今日ね、僕の親友の佐々木が昨夜から帰ってこないって、妹から相談された」

「えっ？」

(ひよつとして、あの人？)

「どうして？」

「彼の売ったブランコで子供が事故死して、幼稚園が訴えられたって」

「そんな」

「製品が悪いんじゃないよ。園の管理不行き届きで」

「なんてこと」
「ああ、気の毒で返す言葉が無いよ」
「そうだったの」
「何が？」
「うん、何でもない」
「うまそうだなあ、カルパッチョ」
「うん、食べる？」
「うん」
豪のケータイが鳴った。
「帰って来た？ よかったー」
佐々木君も冷静になって考えたらしい。自分の今後のことも。
「ねえ」
「うん？」
「まずは食べてから」
「何だよ」
「あとで」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9086k/>

春の嵐

2010年10月8日14時13分発行